

若き日の断片 : 創作

著者	松井, 武州
雑誌名	龍南
巻	2 2 5
ページ	3 4 - 4 7
発行年	1933-07-02
その他の言語のタイトル	若き日の断片 : 創作
URL	http://hdl.handle.net/2298/7129

創作

若き日の斷片

文三 甲二 松 井 武 洲

1

長雨の後だつたので一層美しい朝だ。北の窓から勢ひよく流れ込む朝の光に快よい瞳を見張つて手欄に凭れて居る哲夫ではあつたが、白い光が輝けば輝く程魂は恐怖に襲はれて震へて居た。

防いでも防ぎ切れぬ情炎にペロ／＼甜められて悶へながら悪魔になつた暗黒の昨夜。歪んだ意識の中で記憶に泛ぶ限りの女達をどんなにひどい目に遭せたらう。幾十回繰返した恐怖であり、後悔であり、羞恥であつたらう。虐げられた魂は戦きながら消然と幾十回目かの裁きを待つて居た。

迸り出ようとする情熱の背後で絶間無く威猛けに光るのは父の眼だ、祖父の眼だ、陰惨な祖先達の眼だ。専横な父權の下で摘取られた青春を憎悪し、遺瀨無い憤懣を悲しくも憤怒に換へて凄惨な呪ひの眼差。

案外大きな勢力を有つて居るのは身体中に散らばつて流れる古代の血液だ。微臭さい嗅ひの中から無意識に現はれる因業な道義觀念に魂は熱風を感じた砂丘の花の様に萎れて仕舞つた。そこでは忌はしい父系制的習慣が僅か許りの方便のために、成熟した本能の習性を余りに忌はしいものにして居た。

羞恥に満ちて濁つた意識の回想ではあつたが懺愧の生汗は最早白い光の中に發散して居た。

余りに不當な未成熟を強制する微臭い習慣!!! 時はあり、時はあつた。然し最早ない。壓縮された従順な情熱は爆發した。哲夫は新らしい社會に余りにも不調和な習慣と矛盾に満ちた制度に反逆を試みた。

弗々と湧上る情熱に若々しい眼を輝せて眺める朝の世界は力に満ちて迫つて來た。

白い光の下でふくらんだ若葉は何と云ふ旺盛な生活力だ。單純化された伸び行く者の美しさだ。樟は樟の中で營みに満足し、皐月晴れの大空に勢一杯唄ふあの若葉達!

何と云ふ自然さだ。美しさだ。

狂ほしい氣持が突然四肢を襲つた。心臓は昂奮し、魂は黄緑に燃上る若葉の真中に飛んで行つた。

伸びよ、伸びよ。何の躊躇が要らう。魂は自然を愛し求めて居る。殘骸を無造作に突通して伸びろ。

若芽を摘取るのは何物だ。それ自身崩壊して行く制度だらうか? 幾百年培養されて來た微臭い血だ。第二の本能だ。

哲夫の全身で新舊の血が互に固執し、争つて心を引搔廻した。

——ナン—— 菜ノ花咲ク道ヲ

若き日の斷片

——ナン——セツ子ガ行クヨ

——リツチャラ、チャラ——子ガ行クヨウ

可愛らしい三人の輪唱が焦立つ心を宥める様に長閑に響いて來た。

茶畑では菜花に打込んで唄ふ子供達の純真さ。一ケの目的に向ふ一つの意識。たとへそれが幼稚な生活であらうとも哲夫は羨ますには居れない今朝だ。

太陽は速度を落しながら悠然と浮上つた。

樟は静かな雰圍氣の中で燦爛として欲望の楽しい満足を味ひながらしかも自由だ。

あの情熱の香はどうだ、あの香は！

2

酒場に一步踏込むや否やボーイの勝誇つた歡聲が向ひのC A F E に挑戦した。

——いらつしやいまし!!

日曜日とは云へ眞晝の酒場はうらぶれて居た。ジャズの狂燥曲の中から老犬の様な女給がノロノロ匍出して來た。

「一杯おつて」

「うむ」

「煙草もネ」

「うむ——」

バットの煙りと薄暗い腐つた空氣の中からじめじめした共同便所の落書が、積重なつて現はれて來た。誘はれる儘に

這入り込んだのが後悔された。哲夫の瞳に女給の姿態を輕蔑しながら陶醉して居る友人の顔が大きく擴がつて居た。

奇妙にくねらす白い腕、媚も手管も通り越した空虚な朱唇、偽りに満ちた瞳と荒んだ表情の底を流れる自己享樂の赤々裸々な意識。

冷たいビールの刺戟は舌の上でこそ快いものだつたが哲夫の魂は汚れた空氣を嫌つて淋しかつた、焦立しい氣持はビールに滲込んで苦つぽく胃を刺戟する以外何の役にも立たなかつた。

機械的な生活と單調な心の平安を攪亂するための酒場か。女給にピッタリくついて女給と乾盃する律義者で朗らかな彼が示す二重人格。成熟した肉體の中で幸福にも對異性心理を誤解して未成熟に甘んじて居る彼だ。それにしても偽りの女の前に、たとへ矛盾はあつても眞實の魂を曝け出して陶醉して居るのは!!

成熟した心を酒と女給で満足させてもよいものか? 純な情熱を享樂の中に煙の様に失ひたくはない。哲夫の魂は依然として青空の下で輝く若葉を訪遑して、新緑の人生を渴望して居た。

「又來てヨ」

「氣が向いたら」

「そんな事云はないでサア」

「來たらどうする」

「イツ!!」

お俠にぐいとすぼめた肩に哄笑を授付けて、追付いて來た友人はニヤ／＼して哲夫をくすぐつた。

「どうだ、少しは憂晴しになつたらう」

「貴様と會つたが百年目だつた」

「どうだと云ふんだ」

「損した」

「晝の酒場は…… ハツ／＼、しかし變つていいぢやないか、彼女奴、フツ／＼」

「女給など不愉快だ」

「氣取るない」

「人形だ、化物だ。魂がない」

「だからこそ面白いんだ」

「貴様見たいな子供には」

「何だと」

「俺はな、目覺めたんだ。今迄の毒々しい生活を清算しやうと思ふ。目指す處は新しいロマンテークの世界だ。昔の人が不自然な制度の中でロマンテークを憧れた様に夢見るだけぢやあ濟まされなくなつたんだ」

「妙な言譯けなど聞きたかあないぜ、愉快になれよ」

「おい」

「何だい」

「俺が戀したらどうだらう」

「今日の貴様は異ふなあ。ほんたうの事かい」

「戀を戀し始めたんだが寂しくなつてしやうがない、焦々しくつて」

「一体相手は誰なんだ」

「居ない。女に戀すりやあ闘争か、屈服か、いづれ俺の青春を賭けた大博打だ」。

「さう云やあ女は悪魔だからなあ」。

「しかし俺達の魂が一番安らかに眠れる所は女の中にありさうなんだ。女の眼を見ろ、あの胸を見ろ、皆母に似てる
たあ思はないか。安心して俺を俺獨りで尊いと思へるのは女の魂の中だけだ。俺はしみく母が戀しくなつた」

「ぢやあ悪魔と許りも云へないかなあ」

「いや、多分に悪魔的だ。あの眼を見ろ、胸に注意しろ、俺達の肉体を吸ひ寄せて押潰したがつて居る。夢見る様な
悦びに溢れた少女達を見ろ。悪魔だ。神様扱ひにされた許りに寂しい目付きのマリヤの像を知つてゐたらう」

「貴様見たいに考へて行きあ戀など出来ない方が當然だ。兎角愉快になれつたら」。

「そんな事はどうでもよい。しかしなあ、俺は寂しくつて仕方がない。或は争闘にも、屈服にも甘んじて魂の安息所
を見付けるかもしれない」

「俺は嫌になつた。貴い日曜を徒費する勿れだ。別れやう」

「さうだ、話したつてこの發作は治りやあせん」

「左様なら」

「左様なら」

鈍く光る透明なスコッチブラックの小瓶を買つて哲夫は下宿に眠りに歸へつた。

温んだ海水が柔かくまつはつて流去る。重い頭を浮沈させながら哲夫は、全身の力と云ふ力を抜いて仰向に浮いて居たやがて夕日が奇麗な海水を紅く染めた。ゆるやかな波の胎動に恍惚となつて、滲透つて来る紅の海水に美しくなつて行く四肢を見惚れる哲夫の潜んで居た意識の中でナチススの精が黄色い蕾をふくらませた。

突然、夕焼雲の裂目を貫抜いて紫の光が黄昏空に擴がつた。

あの幽玄な紫光の深さは、清澄な水の豊かさは――魂は海一杯に擴り凡ゆる欲望は消え去つて自由の悦びが漲切つたゆるやかに慕ひ寄る神秘的な力は水平線の真上に妖しく輝く海王星を母の瞳に變へ、更に令子の眸に換へた。音もなく亂れ騒ぐ紫電の一群を冷たく睨みながら昇る妖光に照し出された波は生あるものの様にうねりに乗つて蠕動し、哲夫の深い本能を靜かに揺り動かした。

――何處迄流れて行くだらう。令ちゃん。

――あゝ、限り無く擴き吾床よ

吾は限無く汝を慕ひき

魂よ、漂へ、漂へ、海の上を

吾を育てし搖籃に

妖光は増してうねりは高く哲夫の魂を揺り上げて廣い胸に吞み込んだ。

「もうし、もし、もし」

「うーん」

「手紙の來ましたけん」

「やあ、これは、ふーん」

「何んか好か夢ば見ごさしたなあ ヒツくくく」

爬虫類の様なヌラ／＼した笑顔は晝寝の夢を引裂いて階下に消えた。

半ば眠つて居る意識のピントを合せながらウキスキイのほのかな酔の中に夢を鋭く想ひ返す哲夫の目に内儀さんが置いて行つた手紙の文字が烙印いた。

驚きと悦びが不氣味なときめきになつて覺め切らぬ意識の中で海王星と令子が靜かにもう一度魂を夢の中に誘ひ入れやうと試みて居た。

哲夫様、早いものですわね、偶然當地に引越して來てからもう一月にもなるんですもの。

海は澄んでるし、山が見えるし、小さくつても洗練された街があるし、馴染めなかつた此土地も住めば都ネ。

今日はお願ひなの、音楽會にお伴させて下さらない？ 父様も母様も御用事なんですもの。お友達は一人も居ないし、私はとても行きたいし、だからこんな急いでお手紙を差上げたの、獨ツ子はこんな時が淋しいわ。是非々々。

令 子

哲夫はもう一杯ウイスキーを飲んで夕方迄眠らうと思つた。歪んだ意識を直してをかうと思つた。

4

「だつてつて普段のお前に似合はないぢやあないの」

「だつてこの方が黒くつてノールだわよ。似合つて?」

「妙な子だこと、貴女と云ふ人は」

「でもね、母様、哲夫さんは黒好みなんですもの」

納戸から洩れて来る笑聲に合はせてシックな室内の裝飾が一齊に微笑みかけた。哲夫は深い信用と自由な交際に對して微笑み返しながら友情の垣根を越さうとした事のない幼時からの理性に滿悦し、一方悶える情熱を寂しくも押付けて居た。

暮近く空から青いくすんだ色が流れて來てしめやかに郷愁を搖動した。

魂の欲望は新舊道德の間で自由を束縛し、自由は更に欲望に齒止めをかける余りに逆説的な過去は明らかな事實として甘酸っぱい回想の中に甦返つて來た。

×

×

×

×

——これは命から二番目に大切なんだもの

——だから一生のお願ひつてのに

——いやだ

——意地悪

――泣虫の癖に

――意地悪、々々々、々々々、々々々……

――泣虫、々々、々々、……

――意地悪!!

――福岡つてどんな所なの

――さあ一度行つたきり、だからよくは知らないけどネ

――夏休は七月でしょ

――何だか心細くなつちやつた

――七月何日から

――さあ、あつベルが鳴つた、左様なら

――何日? お便りをネ、左様なら

――出すとも、出してもいいネ

×

×

×

×

令子の仕度待つ間ピアノの上を一本指で覺束無くたどるのはスーブニールの美しい、懐しいメロディ。

夕暮れの街、日曜の街、街は静かに一日の終曲を奏して賑ひかけて居た。ほんのり霞む灯がヒヨロ／＼河面に踊つて

一抹の感傷と淡い戀心を流して虫も殺さぬ表情をやつて居た。

「戀するとしたらどんな方と？」

「何だつて！」

「アラ」

「知らないよ、だけど眞面目にやるより仕方はないわけだ」

「私だつて、精一杯にやるわ」

「戀はすれどもサ」

「どんな方かしら」

「君のこそどんな奴だい」

「私？ 私？!!」

「……………」

「知らない、私——」

「……………」

「幾時？」

「六時四十一七分」

自尊に満ちて無技巧な技巧を凝らす演奏者、禮儀の鎖に従順な紳士達。薄絹の中でなよやかに美と惡魔をふくんで艶かしい淑女達。

華やかに搖曳する雰圍氣は、哲夫の感情を繊細にし、或は昂奮を優越感に換へた。

奴隸にした悦びか、奴隸にされたときめきか。哲夫は令子の意識の中で主役を演じて居るのを鋭く感じながら、同時に令子から全く占領された感覺の中で漠然とした悦びと怖れを強く否定しやうとした。

5.

吐き出される人波から遠く離れると、冷たい舗道の並木道で神秘的な夜氣の中は二人の世界だつた。濛は濛み、古城の石垣は蔦に絡まれて物懶氣に文明に取殘されて眠つて居るので邪魔にはならなかつた。

プラタナスの青葉を透いて流れる街燈の光が青、白、黒、の玄妙な薄織りをふうわり被せて居るので令子は青葉の精の様だつた。

醸出される無言の會話は理性を壓迫し、弱々しくなつた令子の体は激しい訴への曲線を書いて情熱を驅り立てる。

先刻會場で繰返された拍手のどよめきの中でヒラ／＼と、しかも粘りを含んで律動して居たあの掌だ。余りに白い、柔かさうなあの掌。

哲夫は一步遅れながらそつと自分の左手を背後に廻して右手で掴んで見た。

もつと弾力があるだらう。

左手は右手の中で、ざら汗／＼ばんで居るに過ぎなかつた。

強い情熱の衝動に赫らみながら盗み見る眼に令子の視線が激しく跳び着いて來た。緊張した口唇から繰出される生々しい精魂が哲夫の胸を刺し貫抜いた。理性は紅茶の中の角砂糖の様に崩れ始めた。一鼓動毎に燃え擴る紅い炎に、哲夫は堪え切れなくなつて目を閉ぢた。

熱した網膜の中で古い城壁と石垣が華々しい廣告燈と共に濠の中に崩れ落ちてネバ／＼しい水面は次第に色を失つて行く。ぼんやり意識を離れ行く現實の世界は赤い廣告燈の中心に吸ひ込まれて、暗い塊のある不思議な世界が海の様擴がつた。

そこでは鈍い執拗な感覺が眩暈の渦に浮沈しながら、經い息使ひ、香水の香、間近く流れる生溫さを公然と受入れて居た。

理性は強く怖れながら力を失つて行く。令子の弱々しさに十重、二十重に縛られた官能は喘ぎ、美しい主人の命令に戰慄する奴隸の歪んだ恐悅が深く全身に滲渡つた。意識は遠退き、感覺は感覺の中で傍觀し始め、理性も情熱も、一切の記憶も消え失せてしまつた。

一瞬、激しい魂の叫喚が潜んで居た荒々しい力を呼び覺まして令子の美しい惡魔に挑みかゝつた。主人對奴隸。平安な調和の底を哲夫の魂は鋭く攪亂した。全力を盡して争ふ二ヶの魂の間で白い火花が凡てを燒き盡した。

何と云ふ白熱した生命だ。それにしても何と云ふ醜さだ、寂しさだ。

哲夫は混濁の意識を靜かに照し出した妖光に驚いて立止ると靜かに目を開いた。

冷たい夜の並木道は寂しい現實の觸感か。

最早争鬭は起らなかつた。並木道は續いて居た。無言の會話は長く續き、一度打消された炎は令子の微笑の影で靜かに燃えて居た。

薄紅の頬は幽かな輪光に輝き、すつきりとほつた隆起は廣い額の下で香高い初夏の空氣を感じて居る様だ。伸行く春

の美しさ。少女らしく氣高い令子。

しかし決して情炎に責められた魂でも近寄り難いものではなかつた。

寂とした雰圍氣の中で魂と魂は慕ひ合ひ、眞緑の葉蔭はすつきり洗はれて眸の會話に相應しかつた。最早恐怖も羞恥も起りはしなかつた。

希望の光は強く魂の上に輝き、人生から人生を創造する青春の使者は海の宮殿から現はれて恍惚の中に去つて行つた令子の圓らかな涙が眸から眸に傳つて哲夫の胸に熱いものを味はせた。

勢よく歩き始めた二人は全く新しい並木道を進んだ。

「僕達は僕達二人だ、二人以外ぢやないんだ」

「五月十六日ネ、忘れないことよ」

「あと二時間半で十七日だ、ゆつくり歩かうか」

昨日を振返へらず、明日を思はず、凡ゆる時間と空間から脱出して一歩々々に清らかな法悦を味はひ、醜い争鬭と微臭い血液の嫉妬を忘れて唄ふ哲夫の詩は唯、柔らかな夜氣と香はしい若葉の微動に轉ぶ安らかなメロディを誦して居た